ＥＮＥＯＳ海外渡航支援事業報告書（留学渡航）

2026 年　10 月　29 日

工学部・工学研究科修士課程（どちらか○で囲む）
所属学科・専攻・回生　　建築学科・専攻 修士 3　回生
氏　　名　馬 詠儀

１．渡航期間　　2026 年 02 月　26 日 から 2026 年　09 月　18 日

２．渡航先（国・場所・機関等）

__ドイツ・ベルリン・ベルリン工科大学_____

３．留学で得られた成果（概要）

ベルリン工科大学（TU Berlin）での講義や設計演習は、私の交換留学への期待を完璧に満たしてくれるものでした。 修士論文の研究テーマに重点を置くにあたり、大学が提供する多種多様な講義は、私の研究成果をより広範で深いものにするために非常に有益でした。

私は、異なる時代や表現手法における建築のナラティブ（物語性）を理解するためのゼミナール科目（Seminar）を 3 つと、ベルリンの戦後集合住宅課題に焦点を当てた設計スタジオ（Design Studio）を 1 つ履修しました。設計スタジオでの学びを通じて、建築の改修（リノベーション）についての考察を深め、「歴史的文脈」と「未来のストーリー」の対話を変化させる新たな視点を得ることができました。

ゼミナール科目である**「Modernism(s) in Modernity」および「Architecture Theory/Theory I: Styles Are (not) a Lie: Rethinking Style in Contemporary Architecture」**では、ディスカッションやプレゼンテーション形式を中心に授業が進められました。特定の美学的表現がどのように「様式」として確立し、変遷していくのか、またバウハウスに関する深い議論など、事前課題文献の読解に基づく意見交換を行いました。過去・現在・未来の予測を通じて近代における主導的な様式の移り変わりに触れるとともに、建築的価値を持つ歴史的遺産（過去の建造物）にどう向き合うべきかを再考する、非常に貴重な実体験となりました。

履修登録時に特に興味を惹かれた**「Performing Architecture – Architecture in Action」**では、合理的かつ説得力のある学術研究を構築するための多くの指針を得ました。授業内の実践を通じて、独自の分析ツ

ールと標準図面を用いて研究成果を明快に説明するトレーニングを行い、巨大な研究テーマのもとで様々なプロジェクトに応用可能な研究手法を習得しました。

そして何より、設計スタジオに費やした時間は非常に濃密で素晴らしいものでした。グループワーク形式で進められたスタジオは、以下の 3 つのフェーズで構成されていました：

1.事例研究およびベルリンの植生に関する「調査フェーズ」
2.戦後集合住宅をより深く理解するための「敷地分析フェーズ」
3.ベルリンのヒートアイランド現象に対する緑化ソリューションを提案する「設計フェーズ」

土壌の専門家をはじめとする他分野の教授陣やゲスト講師からの知見も豊富で、既存建築や新築建築における都市緑化の未来像を具体的に構想することができました。

初期段階では、1:1 スケールのプロトタイプを制作し、植物と土壌の相互作用を実体験として理解すると同時に、コンピューターのデータシミュレーションを用いて灌漑（かんがい）システム、気象データ、日照軌跡の検証を行いました。また、都市建築アーカイブに足を運び、戦後建築のオリジナル図面を調査して当時の設計意図を探りました。最終的には、つる性植物を活用し、戦後建築の外観に新たなファサード層を付加する増築システムを提案しました。

ENEOS 奨学金のおかげで、大学での学業にとどまらず、欧州各地の建築の名作を巡る機会にも恵まれ、修士論文に向けて極めて価値ある知見を数多く得ることができました。本プログラムを通じて得た経験と自信を糧に、今後の博士課程（PhD）進学に向けた学術研究へより一層邁進してまいりたいと考えております。

４．奨学金の使途

_往復の渡航費の一部として利用した。